

男湯女湯

潜入ミツシヨン

ふたなりセピアちゃんがイク

甘星セピア

巨根ふたなり娘を温泉に放り込んで
エッチなコトが起きないハズが無い!!

CG集

男湯女湯 潜入ミツシヨン
ふたなりセピアちゃんがイク

あたりめ
ジャーキー



男湯の脱衣所でおじさん達の
視線を釘付け♥

温泉に突然巨根で爆乳の娘がやって来たら…
男も女もふたなり娘に興味津々!!

露天風呂で若い女の子達の集団に潜入♥



な
い
た

※この作品はCG集です

制作(あたりめジャーキー) ■ <http://atarime.dlsite.net/>

本製品は、各権利者の方への販売・貸出・展示を禁止します。本作品はフィクション
であり、実在する人物・団体とは一切関係ありません。本作品は、いかなる性的暴力・
虐待等の性犯罪を助長するものではありません。

男湯女湯 潜入ミツシヨン

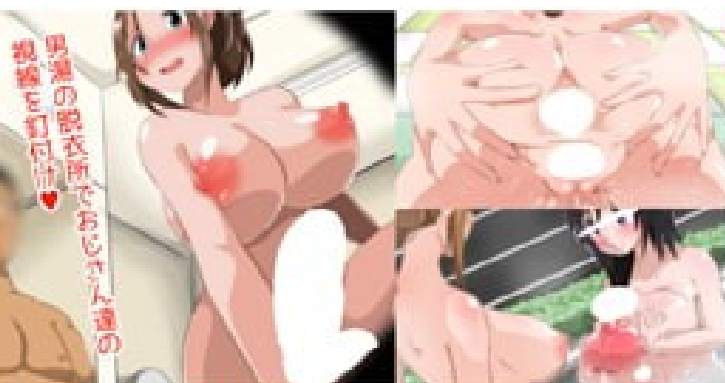
ふたなりセピアちゃんがいク

甘星セピア

巨根ふたなりっ娘を温泉に放り込んで
エロアゲなコトが起きないハズが無い!!

CG集
男湯女湯 潜入ミツシヨン
ふたなりセピアちゃんがいク

ふたりめ
ジャーキー



温泉に突然巨根で爆乳の娘がやって来たら...
男も女もふたなり娘に興味津々!!

露天風呂で若い女の子達の集団に潜入♡



※この作品はCG集です

制作：ふたりめジャーキー 監：ふたりめジャーキー
本作品は「ふたりめジャーキー」の制作、配信、販売を目的として、著作権者「ふたりめジャーキー」の許可を得て制作されたものです。本作品の複製、転載、再配布、二次創作、等々一切の行為は厳禁です。また、本作品の権利を侵害する行為は法的責任を負います。

ふたりめ
ジャーキー



初AV出演から数ヶ月経った
あまほし
甘星セピアちゃん。

今日は二回目の単独企画の為に
温泉宿へやってきました。

「お早うございます」

「お早うございます」

「来ちゃいましたねー。温泉」

「来ちゃいました」

「セピアちゃんは温泉好きかな？」

「私、温泉入ったこと無いんですよ！」



「えーそうなの？」

「だって、その・・・ねっ？」

「あーそっかー。セピアちゃんの
チンポ凄いもんね！」

「やあーん！もおー！！」

「それじゃ今日の撮影で初めて入れるね」

「ふふふ、そうですね」



「今日の撮影はコレです。」

「男…湯?…ん?
女湯、潜入…み、ミツシヨン
ふたなりセピアちゃんがイク?
え、ええー! ちよっとおー!」

「これからセピアちゃんには
一般のお客さんも居る
温泉に入ってもらうんだけど」

「まって…ええ!? 潜入って、え?
貸し切りじゃないんですか!?!」

「はい。普通のお客さんも居ます。」

「それってヤバくないですか?」

「うん。でもねー今回そういう企画だから
前からヤルって言ってたでしょ?」

「えー…でも…えー…」



「で、ただ入ってもらっただけじゃつまらないから
セピアちゃんには温泉で
エッチなミッションをしてもらいます。」

「ここにミッションの入ったクジが
あるからセピアちゃんが引いてみて」

「え。。。はい。」



「あはははっ！
ちょっと！もうーやだあ！」

「何？なんて書いてあったの？」

「・・・お客さんにセピアちゃんのチンポ洗ってもらって、
その後、お礼にお客さんのお、チンポを胸で洗ってあげる」

「ありゃ、いきなり凄いの引いちゃったね」

「え、これほんとにやるんですか？お客さん一般の人ですよね？」

「大丈夫セピアちゃん可愛いから喜んでくれるって」

「えー・・・」



「じゃ、次のミッション引いて」

「ええー！？まだ引くんですか！？」

「もう一個。もう一個だけだから」

「変なの来ないで・・・」

「引いた？」

「ちよっ・・・っと！(笑)・・・ヤバイヤバイ！」



「何何？何引いたの？」

「お客さんとセックスをする」

「はっはっは！
凄いねセピアちゃん！大当たりだよ！」

「何なんですかこれえ。。。ムリムリ絶対無理ですって」

「大丈夫！大丈夫だから！さ、行きましょう！」

「え！？もうですか！？」



男湯の脱衣所へとやって来たセピアちゃん。

裸の男性客が何人か居ることに戸惑いながら

怖々と奥へ入って行きます。

「し…失礼します…」

女性が脱衣所へ入ってきたことに気づいた客は
不審げにチラチラとセピアちゃんを覗き見ます。

「(すごい見られてるう…!!」

本当は皆、撮影の人だよ…?」

でも本当に温泉の普通のお客さんだったら
私すごい変な人って思われちゃう…!!」

タオルを胸の前で握りしめ、

キョロキョロと周りを気にしながら

男達の間を通って脱衣所の棚の前へと歩を進めます。

視線は否応なく男達の逞しい胸板や二の腕…

そして肉棒を追ってしまっています。

「(なんで皆、普通にしてるの?せめて前を隠して…!!
おちんちん見えてるう!」

それにあそこのおじさんがずっと私のこと見てる!!
緊張してもう勃ってきちゃった…!!」

痛いほど感じる男達の視線に背を向け、
柵に向かい合って心を落ち着けようとするセピアちゃん。

しかし、二度気になると止まらない股間の違和感。
ドキドキ鼓動するペニスがスカートを持ち上げていくのを
感じます。

「(どうしよう……もうおちんちん止まんない……)」

「おねーさん。ここ男湯だよ。」

そのとき隣で恐る恐るといったような口調で男の子が話しかけて
きます。

男の子は恥ずかしそうにタオルで股間を隠しています。
どうやら着替えたいけれど、女の人が近くにいるので、
タオルから手を離せないみたいです。

「(お、男の子!? この子は絶対撮影の仕込みじゃないよね……?)
嘘……じゃ、やっぱり皆、一般のお客さん!?)」

助けを求めるように視線を彷徨わせると、後ろからずっとみている
おじさんと目が遭います。とっさに愛想笑いをして顔を背けました
嫌な冷や汗が流れ、ビクンと肉棒がまた固くなりました。

「あ、コラー！すみませんウチの子が何か失礼を…
ええっと、女湯は隣ですよ」

父親らしき男性が寄ってきて最もなことを言います。

「(うう)。私が一番わかってますよ!!」

その男性は息子の手前、平然と振る舞おうとしていますが、大きく開いたワンピースから半分くらい零れているセピアちゃんの爆乳に釘付けでした。

その視線と自分の場違いさに羞恥心が煽られ、セピアちゃんはまた股間が熱くなってしまう。

「(ぐ)ごめんなさい。私、実はふ、ふたなりなのでっ!!」

「えっ?」

「あ、あの。私こんななので、女湯はちよつと無理かなって…
それで…こっちに来ちゃいました。すみません。」

目の前の父子に顔を赤らめながら、スカートの前面部分を見せて説明します。

セピアちゃんのスカートは三角に立派なテントを張っています。父子は面食らったように彼女の股間を凝視してしまいます。

「は、はあ…そ、そうでしたか…それはこちらこそ失礼しました。」

「いえ…すみません。えへへ///」



なんとかその場を凌いだセピアちゃん。
しかし、ミッション遂行の為にはお風呂に入らないといけません。
周りを気にしつつも、服を脱ぎ始めます。



先ほどのやり取りが聞こえていたのか脱衣場にいる
男達の視線がセピアちゃんの股間の膨らみに集ってる気がします。

「(おちんちん見られてる……!!
もう勃起隠し切れないし……早く済ませちゃお)」

ワンピースを脱ぐとブラも付けていない爆乳がブルンと飛び出します。

髪をまとめるために両手を後ろ手に回すと、そのボリューム満点のおっぱいが前へと突き出され、ぶるぶる震えます。

「(こんなに見られてる中で胸もおちんちんも隠せないなんて髪、ショートにしとけば良かった……!)」

そしてパンツの中では布を押し上げて、くっきりとペニスの形が顕となっていた。

「(ちよつと濡れちゃってる……タマタマもふくらんで……急がないとフル勃起しちゃう……♡)」



ポルンの

髪をまとめ終わり、ついにパンツへ手を掛けます。

開放されたセピアちゃんのペニスが

ビンツと力強く跳ね上がって、パチンとお腹を叩きました。

全てを脱ぎ去ったセピアちゃんに周りの男達は

もう憚ること無くその爆乳を、尻を、そしてペニスを凝視しています。

羞恥のあまり、セピアちゃんとはつさに手で胸と股間を押さえます。

しかし、巨大過ぎるそれらはセピアちゃんの手では覆いきれず、余計に扇情的に見せてしまいます。

「あは、あはは・・・そ、それじゃ、失礼しますね・・・」

セピアちゃんはタオルで局部を押さえると、逃げるように浴場へ向かいます。

「(前の撮影より恥ずかしすぎるよお・・・)」

浴場は屋内と露天風呂の2つがあるようです。
なかなかの広さのようで、お客さんもそれなりに入っていました。

セピアちゃんが浴場へ足を踏み入れると
男性客達がギョツとした様子でセピアちゃんに注目します。

「(うわあっ……広い！それにお客さんも沢山いるよあ……
ああ……もお……どうにでもなれ!!)」

突然の出来事に固まってしまった男達を尻目に
セピアちゃんは吹っ切れたように堂々と浴槽へと入って行きました。



「…失礼します」

それでも奥へ進むのはためらいがあるのか
セピアちゃんは外の露天風呂ではなく入り口近くの
浴槽に入ります。

「どうしたんですか!?!」男湯ですよ!?!」

そばの男性客が信じられないといった様子でセピアちゃんの
顔と胸を凝視しています。

「すみません。私、ふたなりなんですけれど…
ご一緒してもいいですか」

「え? ふたなり…?」

「いや、でもちょっとダメじゃないですかね…?」

「だ、ダメじゃないですからっ! お願いします」

「まあ、いいんじゃないかな?」

困惑する男達の視線がセピアちゃんのペニスに集中します。
見られないように上向きに勃起しようとするペニスを押さえて
お湯に隠そうとしますが、隠そうにも大きすぎてほとんど
見られてしまっています。
男性客達はその巨根に目を見張ります。



浴槽へ浸かり、局部を隠すことが出来てようやく一息つけたセピアちゃん。

ミッション達成の為にお客さんにコミュニケーションをとります。

「なんで女湯じゃなくてこっちきちゃったの？」

「コッチの方が入りやすいかなー？つて…えへへ」

「あの、失礼ですけど、その…胸、凄いですね」

「あ、はい。よく言われます。」

セピアちゃんの双球は浮力と重力で横へ広がるようにして水面にたふんたふんと浮いている。

「(なんとかお風呂に入れたけど…男の人に

わたしのおちんちん洗ってもらわなきゃいけないなんて…ああつ、もうドキドキして勃っちゃう…♡)」

セピアちゃんは興奮のあまり水面下で勃起しようとするペニスを両手で抑えるのに必死です。

セピアちゃんのペニスは最大勃起で軽く40cmを超えるので、勃起すると水面から飛び出してしまうようになります。



「(エッチに誘わなきゃいけないけど…
どうしよう…)」

どうしようか考えている間にもどんどん股間が膨らんでいきます。
ペニスを握りしめてモジモジしていると胸がチャプチャプゆれて
隣の男の人が息を呑むのを感じます。

「あ…あの？気になります？私のおっぱい？」

「え、アハハ、」めんなさい」

「いいんですよ。あ、よかったら触ります？」

「え!？」

男の人が驚いて目を見開く。
その表情はだらしなく
緩んでいて
欲情しているのが
丸分かりでした。

「(あ、やった♥なんかOKっぽい…♥)」

「ほ、ほんとにいいんですか…?」

「はい♥ど、どうぞ♥」

セピアちゃんは男に向き直り乳房を前へ突き出した。
恐る恐るといった感じに男はセピアちゃんの片方の胸へ手を伸ばし
揉みます。

「んん♥」

「す、でか…やわらかい…!」



「ああ…乳首…♡」

男の手の平がセピアちゃんの大粒の乳首を掠り、セピアちゃんから声が漏れ出ます。

エッチすることを考え続けていたセピアちゃんは胸を揉まれることで完全にスイッチが入ってしまいました。水面下でペニスを押さえていた両手は本能に従ってシコシコとオナニーを始めていました。

「くっめん！」

男は許可無く乳首に触れたことを謝りますが、セピアちゃんは男の手に自ら乳首を当てていきます。

「大丈夫です…♡いいですよ♡もつとして♡」

男はセピアちゃんにうっとり見つめられて気を良くしたのか今度は遠慮なく乳首を摘み、乳を揉みます。



「ハァハァ♥上手ですね…♥」

「そっ…」

「あの…♥良ければなんですけど…
もつと気持ちいいことしません?」

「え!?!」

「貴方もこんなにしてるじゃないですかあ♥」

セピアちゃんは男の股間に手を伸ばし、水面下でその硬くなった男の肉棒を掴んで扱きます。
いきなりのことに男はビクンと腰を引いて情けなく呻きました。

「い、いいんですか?」

「はい♥でも…私の方が我慢できないんです♥
分かります? 私のおちんちん…♥
こんなになってるんですよ♥」

セピアちゃんは男の手をとり、乳房からその下で脈動する巨棒へあてがいます。

片手では掴みきれないほどに太く膨張したそれに男は驚いて硬直してしまいました。



「うーじゃアレなんで…向こうでいいですか♥」

セピアちゃんは洗い場の隅の方を指します。

「じゃ行きましょう♥」

「は、はい」

セピアちゃんが立ち上がると、入浴前に比べて倍に膨らんだふたなりチンポがザバアと遅くお湯の中から飛び出した。亀頭が皮で半分くらい隠れているものの、ヘソ上まで反り返ったペニスに周りの男達が好奇の目を向けます。

「うふふ♥あんまり見ないで下さい♥恥ずかしいです♥」

恥ずかしいと言いつつもセピアちゃんはペニスを隠そうともせず歩く度に振り子のように揺れるペニスを周りに魅せつけました。

「(みんな私のおちんちん見てる…♥あ…あつちのおじさん、隠れてシコつてる♥こつちのお兄さんも…♥ヤバ…なんか楽しくなってきたかも♥)」

お湯の下で肉棒を扱っているだろう男性の横を通り過ぎざまにセピアちゃんは自分のふたなりチンポをいやらしく扱って見せます。その男性は眼前にまで迫ったセピアちゃんの迫力ある爆乳やペニスを凝視したまま固まってしまいました。

「(ああ…♥私、この人達にオカズにされてる…♥)」

快く相手してもらえらることになった男性と
洗い場の端の方へやってきたセピアちゃん。
最初のミッションへ挑戦です。

「それ…凄いですね。ふたなりってみんなこんななんです？」



男はセピアちゃんの股間を指して言います。
興奮でまた少し大きくなったペニスは
先端が完全に剥けて、
ピンクの亀頭が露出しています。
その大きさは椅子に腰掛けて
背を丸めた状態だと胸に楽々届く程に長いです。

「どうでしょうね…わかんないですー♥えへへ
それより…折角ですから洗いっこしませんか？」

「ぜひー」

男が石鹸を手に取り、泡立てるとセピアちゃんの体を直接
手で洗い始めます。

「あん♥またおっぱい♥」

男が後ろからセピアちゃんの乳房を鷺掴みして揉みしだきます。ツンと勃った大粒の乳首に指が掛かる度にセピアちゃんは気持ちよさそうに吐息を漏らします。

「じゅじゅの〜」

「はい♥乳首感じちゃう♥あっあっ♥もつとつよく摘んで♥」

乳首をギュッと押し潰してやると、セピアちゃんは快感に耐えるようにぶるぶる身を震わせ、ペニスがぶるんぶるんと大きくしなります。

「はあん…♥あ、あの…そろそろ

おちんちんもお♥洗ってももらえませんか…?」

「は…はい…」



男がセピアちゃんの前へ周りビクビクと鼓動を打つ
ふたなりチンポをギュッと掴んだ

「あぁっ♥いい♥」

「うわ、硬っ……!」

男の握力で力強くギューギューとペニスをマッサージされて
セピアちゃんは歓喜の悲鳴を上げてしまします。
そして強い刺激にペニスはあつという間にまた一回り膨張します。
「あつあつあゝゝ♥気持ちいい♥」

「またチンポでつかくなってますよ!」
これ腕くらいあるんじゃないですか?」

「そんなことないですよ♥は、恥ずかしい♥」



「…もう大きくならないですね。
すごいなあ、こんなになっちゃうんですねー」

「えへへ♥おちんちんフル勃起させられちゃいました♥」

推定50cmに届きそうな巨根は男の手でも掴みきれず、
力強くドクンドクンと脈を打ち、
我慢汁をだらだらと垂れ流していた。

「これってちゃんと…射精とかできるんですか？」
「ん〜♥気持ちよくなったら…ね？
私、もつと気持ちよくなりたいです♥
お兄さん私のおちんちんイカせて♥」

セピアちゃんは蕩けた表情で男におねだりします。
もう射精のことしか頭にない様子です。



「それにしてもデカイなあ。もしかして自分でフェラとかできちゃうんじゃないですか？」

「えー♡」

「ちよつとやってみてよ」

男がセピアちゃんのペニスをぐいと顔の前に押し付けます。竿がむにゅりと胸の谷間に挟まってしまっています。

「ん♡♡」

セピアちゃんは体を前屈みに曲げてペニスの先端へと舌を伸ばしました。

「本当にフェラできちゃうんですねえ」

「もう♡恥ずかしい…♡ん…ぺろ…ぺろ♡」

セピアちゃんは先っぽの穴やエラのくびれを舌を動かしてペロペロと舐め回します。

男の扱く手の動きも相まって気持ち良すぎるのか時折、動きを止めて快感に耐えるように震えています。

「んちゅ…♡ハアハア♡い、イキそうです♡
おちんちん射精しちやいそう♡」



「あああ♥や♥い、イキそう♥お、お願いします♥
もっとな強くシ〇シ〇して♥おちんちん気持ちよくして♥」

射精が迫ってくるセピアちゃんは余裕の無い声で
男におねだりします。

「あ♡そう♡それ、いい♡あ♡あ♡イク♡
おちんちんイク♡イツク♡」

ペニスの脈動は速くなり、
金玉がキュンキュンと疼いているようです。

ペニスがビクンと強く跳ね、ぶくりと一瞬膨らむと
先っぽから濁流のように精液が飛び出しました。
溢れる精液が真上に飛び、
セピアちゃんの体にベタベタと降り注ぎます。
大量の精液を浴び、
まるで大人数に犯されたかのような有様でした。

「ハアハアハア♥きもち、いい♡」



「うわぁこんなに沢山でるんですね」

「あ、ありがとうございます♡すっごく気持ちよかったです♡」

セピアちゃんは射精を終えて、
だらりと垂れ下がったペニスを綺麗にシャワーで
洗ってもらいました。

「こんどは私がやってあげますね♡」

フェエ♡

「お、お願いしますー!」

セピアちゃんは男を床に寝かせるとその上に覆いかぶさり
2つの柔らかい爆乳で包み込んであげました。

「お、おおお!」

「どうです?気持ちいいですか?私のおっぱい♡」

「はい!爆乳。ハイズリ最高です!」

ピッ
ムニョ♡
ピッ

男の肉棒はすっぽりとムチムチの爆乳に挟まれて
心地良い圧力を与えられています。



「お兄さんのおちんちんちゅちゅいのに
こんなにガチガチに硬くなつてて可愛い♡
あ♡お汁出てきてる♡ああん♡男の人の匂い凄いえっち♡」

体重を乗せて押し付けた乳が男の股間でひしゃげ
お互いを強く刺激し合います。
乳を揉む手は大きく膨らんだ乳輪に食い込み
積極的に快感を貪ります。

「んっ♡ん♡おちんちんピクピクしてます♡
気持ちいいんですね♡あっああん♡私も乳首♡いいですっ♡」

「おっぱいが凄い吸い付いて…っ!!
きもちいいですーすぐにでも出そうですっ」

「あは♡お兄さんダメですよ♡もつと我慢して♡」



「はあはあ…あ、あの…
なんか硬いの当たってるんですけど…?」

男は内腿に熱くて硬い感触を受けてセピアちゃんに尋ねます。

「ごめんなさい♥お兄さんのおちんちんの匂いがえっちすぎて
また私も勃っちゃいました♥」

セピアちゃんは恍惚とした顔でお尻をモジモジ揺らして言います。
男の内腿に極太の亀頭をグリグリと擦りつけて
気持ちよさそうな甘い吐息をついています。

男は太腿がセピアちゃんのふたなりローションで
ヌルヌルにされていくのを感じました。

たっ♡ぱん♡

たっ♡ぱん♡

「あ、あのお♥ごめんなさい♥私も…♥
私も気持ちよくなっただけいいですか?」

「え?」

男は一瞬、セピアちゃんの巨棒で貫かれてしまうんじゃないかと冷や汗をかきましたが、幸い男の予想は外れて、セピアちゃんは背中を丸めて自分の肉棒をおっぱいの隙間へ潜りこませました。

「えへへ♥いつしよにパイズリしちゃいましょう♥」

「うっっー!、これ気持ちいいっ」

セピアちゃんのガチガチに硬くなったペニスが男のペニスを下からゴリゴリと乳の谷間により深くまで押し込んでしまいます。そして、セピアちゃんから止め処なく溢れる我慢汁がおっぱいを一瞬でニルニルにしてしまい。先程とは比較にならないほどの気持ちよさを男に与えます。



「ああん♥お兄さんのおちんちんがエラに引つかかって
気持ちいいです♥」

「そんなに強くしたら僕も…もう……!」

男の腰がビクビク跳ね、茶褐色の亀頭からびゅっと
精液が飛び出します。

「きや♥」

「はあ…はあ…い、いっちゃいました」

「もー♥イクならイクって言うてくれないと…♥
私も一緒にイキたかったのにい♥」

ひゅ♥



セピアちゃんは男のペニスを両乳とふたなりチンポの
三方向からギュッと押し付けザーメンを絞りとりま
す。堪らず男はうめき声を上げ、
肉棒の先からはザーメンがじわりと滲み出てきます。

「んー♥お兄さんの精液…ちよつと薄いすね
男の人ってこんななんですか？」

「はあはあ…きよ、今日はたまたま調子悪くて…
溜まっていたらもっと出たよ」

先ほどのセピアちゃんの豪快な射精と比べられていると感じて
男は少し渋い顔をしています。



「ごめんなさい…そろそろ私も…♥

イキそうです♥もうちよつとこのまま♥

「このままでもいいですか？」

「あああつ、まってイッたばかりだからそんな強くしたら！」

「はっはあつ♥お兄さんのおちんちん♥気持ちいい

おちんちんが擦れて気持ちいいですう♥」

セピアちゃんは男の事などお構いなしに

自分の乳でぎゅうぎゅうとパイズリを続け、男のペニスで
自分のふたなりチンポの感じるくびれを擦り当てます。

「い…いい♥おちんちん♥イクっ♥

お兄さんのおちんちんと自分のパイズリでいつちやいますう♥」

セピアちゃんが一際強く乳圧を掛けるとどぶどぶと
真っ白な精液が男の腹から胸、顔にまでたっぷりと吐き出されます。

びしょびしょ
びしょびしょ
びしょびしょ

「きゃあつ♥ごめんなさいっ！私、こんなに射精しちゃって！」

「だ、大丈夫です」



最初のミッションの洗いっこをクリアしたセピアちゃん。
お相手をしてくれた男性はもう勃たなくなってしまったので、
お礼を言ってお風呂から上がっていききました。

次のミッションは男性とのセックスです。
セピアちゃんは周りで見ていた他の男性に声をかけて
お相手をしてもらいます。

「すみません♥」

「は、はい！」

セピアちゃんはセピアちゃんのエッチをオカズにオナニーをしていたおじさんに声をかけます。おじさんはセピアちゃんの大量の精液に濡れた爆乳や萎えてもなお巨大なペニスを無造作に揺らして近づいてくる姿に一層股間を固くしてしまいました。

「私とエッチしません？」

「え!? お、おじさんでいいの?」

「はい♥お願いします♥」

もう周りの人もペニスを握ってオナニーをしているような状況です。そういうことをしても許されるような雰囲気のおかげでセピアちゃんはすっかり物怖じしないで声を掛けられました。



「私、ちよつと射精しすぎちゃったので…
女の子の方でお願いします♥」

セピアちゃんはおじさんの前でガニ股で足を開き、
股間を突き出します。
白濁液でドロドロになった巨大なふたなりチンポが
だらりと卑猥にぶら下がっています。

「おじさんの硬いの私に下さい♥」



「じゃ、じゃあ失礼」

おじさんはセピアちゃんの玉袋を下から優しく支えるように持ち上げました。おじさんは手にずっしりとした重みを感じて、まだまだ中にたっぷりザーメンが詰まっているのがわかりました。

「あはあ♡くすぐったい♡」

「気持ち良いのかい？」

「はい♡タマタマ感じちゃいます♡」

水風船のような弾力のそれをおじさんはタップタップと揉みほぐしてあげます。

セピアちゃんはその刺激に可愛らしく喘ぎ声をあげています。しばらくすると、萎えていたセピアちゃんのふたなりチンポがムクムクと勃起し始め、その下に隠れていたおまんこが露わになりました。



「ほう…下はこうなってるのか…
厭らしいピンクだな…」

「やだぁ♥見られちゃつてる♥恥ずかしい♥」

「何が恥ずかしいだ。こんなエロい体で男湯に来て
自分から誘っておいて！」

「は、はいい♥ごめんなさい♥」

おじさんは空いた手でセピアちゃんの大きな乳首を捻り上げ、
睾丸を支える手でトロトロのおまんこに中指を突っ込みました。

「んひい♥」

「おお！良い絞まりのマスコだな」

おじさんの節くれだった指が
セピアちゃんの浅く感じるポイントを
ぐちゅぐちゅかき混ぜます。

膣肉がぴったりと指に絡みついています、
愛液がたつぷりと溢れているおかげで楽々と抽送できています。

「たまらんなぁ！へへ、こんなにグチヨ濡れなんだ…
おじさんの挿れるぞ…！」

「はい♥おまんこしてください♥」

「ぐうっ……こんなに良いマンコ、久しぶりだっ
腰が……止まらない！」

「ああっああ！おじさんの……！激しすぎるい♡」

セピアちゃんのもどかしいグラインドに耐え切れなくなった
おじさんが下から欲望のままに突き上げてきます。
突く度におじさんのお腹にセピアちゃんの大きな玉袋がぶつかって
パンパンと屋内浴場にくちや音が響き渡ります。
周りの男性客達がその様子を物欲しそうに眺めながらオナニーを
しています。

「はあはあ……！気持ちいいぞ！このふたなりエロマンコ！」

う……、こんなデカイチンポぶら下げて恥ずかしくないのか！」

「あひい……！おちんちん♡やアン♡気持ちいい♡」

おじさんが唐突にセピアちゃんのペニスを力一杯掴み、

ゴシゴシ上下に擦ります。セピアちゃん汁でヌルヌルになった
その巨棒を扱かれてセピアちゃんの体は勝手に
キュッと下半身に力が入ってしまいます。

「おおっ……！くっ急に絞まりがっ！」



「い、イクぞっ!」

「はい♥イッて♥このまま♥膣内♥で♥」

「えっ!?あああだ、ダメだもう我慢できん!イクっ!」

射精を告げたおじさんに対してセピアちゃんは抜くどころか深く腰を沈めてペニスを逃がさないと言わんばかりにぎゅうと絞め上げます。

そのとたん、おじさんの肉棒が限界を迎え、ビクンッビクンッと膣内へ白濁を解き放ちました。

「ああああン♥あつたかあい♥」

「はあ、はあ…な、中出ししてしまった…」

「シ♥今日は大丈夫ですから♥それより…こんなにいっぱいありがとうございました♥」

セピアちゃんのおまんこから萎えたおじさんのペニスがズルリと引き抜かれると、ごぶと精液の塊がその場にポトポト落ちました。





2つめのミッションも余裕のクリアしたセピアちゃん。
あとは無事に部屋まで戻ってくるだけです。

ほっとしたセピアちゃんは体を洗ってお湯に浸かり直します。

しかし、おじさんとのセックスを魅せつけられてしまった
他の男性客がセピアちゃんに詰め寄ってきます。
どうやらみんなセピアちゃんとエッチがしたいようです。

「次、やらてくれよ」

「お、俺もー!!」

「えっええっ…ちよつとそんなに困ります」

「男湯で知らないおっさんとハメるなんて
よっぽどの変態なんだろう? いいじゃん俺もやらせろよ」

「(仕事だからしてるだけなのに!!
私そんなに変態じゃないもん!)」

酷い言われように少しムツとしますが、
男達はセピアちゃんを囲んで帰してくれそうにありません。
セピアちゃんは仕方なく相手をすることにしました。

「うううう…じゃあ、一人一回だけですよお?」

「やったー!じゃ、後ろ向いてマンコ開いて」

「つて、ええ…ちよつと」で?」

「いいじゃんいいじゃん」

男は湯船に浸かるセピアちゃんを中腰に立たせて
お尻を開かせておまんこを丸見えにさせます。

ぷにぷにと柔らかそうに膨らんだアナルの窄まりや
弛緩してパツクリと黒い穴を見せる膣穴がお湯に濡れて
とても卑猥に艶々と輝いています。

そしてその下にはセピアちゃんの睾丸が浮きのように
ぷかぷか浮いています。

洪々とはいえ、まだエッチな気分の余韻が残っている
セピアちゃんは既に結構ヤル気マンマンでした。
お湯の下では勃起したふたなりチンポが浴槽の
床のタイルにおしつけられていました。

「(うう、予定と違うこととして監督さんに
怒られないかなあ……でも、こうなっちゃったら
しかたないよね……?)
スタツフさんが止めに来ないから大丈夫だよね……?)」



「すっげえデカ尻だな！マンコもうヌルヌルじゃん。挿れるぞ」

「きゃあっ！いきなりい♥深い♥」

男はセピアちゃんの尻を掴むと、怒張をその秘穴に挿入しました。前座も無く一気に奥まで突っ込む乱暴な挿入でしたが、充分に愛液が詰まった膣肉は男のペニスを楽々受け入れます。

「すっげえ、中締まるなあっ！ケツもムチムチでキモチイー！」

「あんっ♥ああん♥お兄さんの硬い♥あっあっん♥」

男は夢中になってズコズコと腰をピストンさせます。あまりの激しさにセピアちゃんのピンクの膣肉がめくれあがってしまっています。

「ああああ♥ヤダあ♥乱暴にしないでえ♥」

セピアちゃんが嬌声混じりに抗議しますが、男はくぐもった声を漏らしながら腰を振り続けて一向に止まる気配がありません。



動きを止めると膣肉がぎゅうと絡みついてむず痒さにも似たゾワゾワする快感がペニスから下半身全体を襲ってきて腰を振らずにはいられなくなるのです。

しかし、激しく腰を打ち付け続けた所為で男はすぐに音を上げてしまいました。

「はあっはあっ—うっ—いい、イクっ—!!」

「きゃあっ♡」



男は跡が付きそうなくらい強くセピアちゃんの尻肉に指を食い込ませ、上体を反らしながら子宮めがけてドクドクと射精をしました。

勢いよく飛び出したザーメンが膣内から滴り落ちて、セピアちゃんの金玉をドロリと汚します。

「へへっ…俺はコッチの穴にハメさせてもらっぞ」
「え…？きやああ♥」

次の男はセピアちゃんの尻を撫でると、ズブリとセピアちゃんのアナルに親指を突き挿れました。

「思った通り、簡単に挿いったなあ。
アంత、ケツ穴でも結構遊んでんだろ？
ハメられてるときずっとチンポ欲しそうにパクパクしてたもんなあ」

「~~~~~♥♥」

ズボボ
グログロ

セピアちゃんはアナルを弄られて真っ赤に赤面してしまいます。
男の言う通り確かにセピアちゃんアナルオナニーはお気に入りのプレイでしたが、それを認めるのはとても恥ずかしくて口をつぐんでしまいます。

その様子を図星と捉えた男はジュポンと親指を引き抜き、セピアちゃんのアナルに亀頭を押し当てます。

「おらっチンポ挿れるぞっ！」

「んんん♥」

太いペニスに拡張されて、アナルが真っ赤に充血します。
侵入してきた異物に体が強張り、ギチギチと
ペニスを絞め上げます。

「うおおキッツー！」

奥まで突っ込まれたペニスがズルズルと引きぬき、
また突きこむ。連続する擬似排泄の快感に
セピアちゃんは恍惚の表情を浮かべます。

「(お尻……♡気持ちいい♡)」

思わずセピアちゃんはお尻を自分からピストンに合わせて上下に
振ります。括約筋が男の亀頭にガッチリハマって
裏筋を的確に扱き上げます。

「おおっ！いいイクっ」

「あんっ♡あんっ♡出して♡お尻にいつぱい下さい♡」

男は後ろからセピアちゃんに覆いかぶさり、アナルの奥へ
おもいつき射精をしました。

「ハアハア♡お、お尻いいですう♡」

セピアちゃんもお湯の中でこっそり射精をしてしまっていました。

「セピアちゃんおかえり！男湯どうだった？」

「人がいっぱいでした」

「じゃあいっぱい見られちゃったね
ミッションはちゃんとできたかな？」

「・・・はい」

「本当？」

「ちゃんとやりましたよ！大変だったんですからね！」

「じゃ、ここに映像があるから一緒に確認してみよっか」

「え？」



「ちょ、ちょっとお！ま、まって！え、ええー？」

「あー。ずっとセピアちゃんフル勃起してるねー
前よりおっぱいもおっきくなった？」

「まってコレやばい！え、だってこれ見えちゃってますよ！」

「大丈夫大丈夫。コレ撮ったばかりだから見えてるの。
ちゃんと後でモザイク修正するから。」

「でも…もぉー！
ちゃんとしたからもういいでしょう？
恥ずかしい」

「わかったわかったw
次のミッションは何だったっけ？」

「え…お、お客さんと…っでわあああ！もー！やだー」

「あ、すごーい！セピアちゃん自分からこんなに広げて」

「見ないで！違うんですー！これは違くて」

「何が？だってほら自分でお尻広げてるよね？あーやらしー
うわーアナルセックスまでしちゃったの？すごいねー」

「もうっ！もー！いぢわる！」



「なんでこんなに大胆にしちゃったの」

「だって…エッチな気分になっちゃったから…いやああ」

「エッチな気分になっちゃったのかー。
それじゃしょうがないね」

「うん、しょうがないです」

「それじゃ、ミッションは大成功ですね。おめでとう！」

「え、はい。ありがとうございます。」

「じゃ次のミッションなんだけど」

「え？えーっ！？あははははは！ちょっと、えーっ！？またあ？」



「はい、またなんです。次のミッションはですね…。セピアちゃん、この企画のタイトル覚えてる？」

「え？なんでしたっけ？」

「はい、コレ、ここ読んで。」

「男湯女湯、潜入ミッション
ふたなりセピアちゃんがイク。
…ん？男湯女湯、潜入ミッション…」

「気づいた？」

「女湯？」



「はい次は女湯に入ってミッションしてもらいます。」

「えー！？うふふふふっ！まってくださいよ
ミッションって、エッチなことですよね？」

「もちろん」

「女湯はマズくないですか？」

「でも男湯よりは入るの簡単でしょ？」

「まあまあまあ・・・はい。男湯より入れるかもですけど」

「え？何？もしかして女の人の人体見て興奮しちゃうの？」

「しーまーすよおー！」

「そっかそっかじゃあ、セピアちゃんの男の子のところが
見られなければ大丈夫じゃない？」

「ええっ！？無理ですよお！」





「とにかくミッション引いて」

「え、さっきと違う・・・」

「気づいた？書いてあるのもちょっとだけ違うから
はい、早く引く」

「・・・うう。」
「ちょ・・・！ダメダメダメwww」

「何？なんて書いてあるの？」

「・・・勃起チンポをお客さんに見てもらって感想をもらう。
見られないようにって言ったのに！コレ見せてますよね！？」

「やったね！さっきより簡単なミッションだね！」

「簡単って・・・そうですけど、えー？恥ずかしい」



「はい、次引いて」

「うん・・・」

「あはははっwwwうえー？」

「あ、凄いの引いたのかな？」

「お客さんとお・・・セックスする・・・×3」

「また大当たりだ！凄いなセピアちゃん」

「無理！絶対無理ですよコレ！だって女湯ですよ！それに「×3」って」

「三人とセックスするってことだね。」

「三人もですか！？それに女の人とセックスって・・・
私が挿れるしかなくないですか？」

「あーセピアちゃんそんなことを考えてたの？」

「違ーうー！だってコレに書いてあるもん」

「ハハハ！はい、もう一回引いて」

「え？だってもう、え？もう2回引きましたよ？」

「でもほら、もう一番すごい引きちゃったから大丈夫だって」

「ええ・・・」

「・・・」

「何引いたの？」

「お客さんにフェラチオしてもらおう。」

「大丈夫大丈夫！セックスよりは簡単だよ！」

「簡単じゃないですよぉ！」



「がんばってお願いすればなんとかなるよ！」

「え、えー……？」

「ここでセピアちゃんに良いお知らせです」

「うう……何ですか？」

「なんと！今、JDの団体客が来ています。良かったね！」

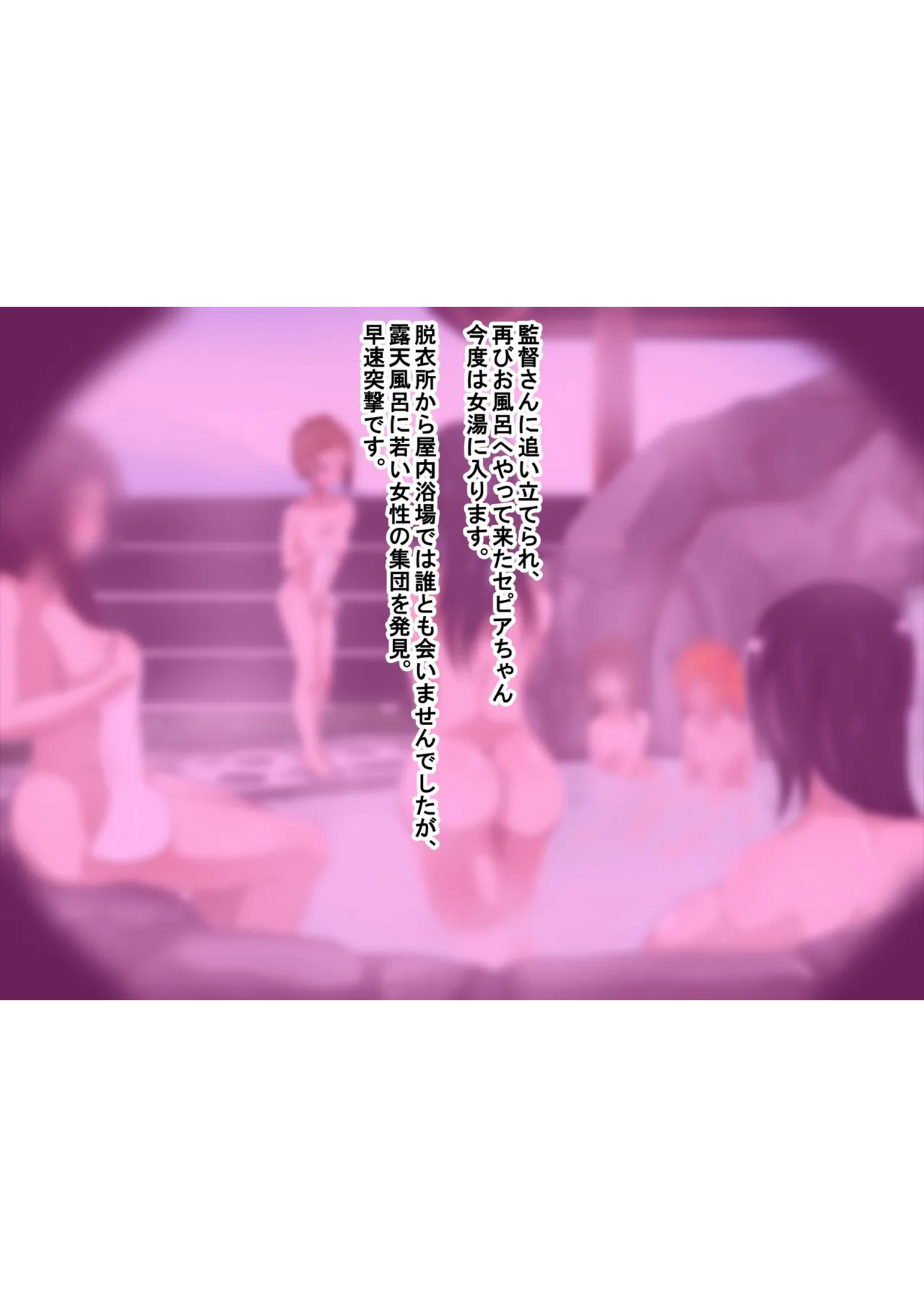
「ちょっとお～！もお！やだあー。難易度上がってますよお！」

「でもヤル気でたでしょ？はい、じゃ頑張って！」

「ええ！？帰ってきたばかりなのに今行くんですか！？」

「大丈夫だから！はいタオル！」





監督さんに追い立てられ、
再びお風呂へやって来たセピアちゃん
今度は女湯に入ります。

脱衣所から屋内浴場では誰とも会いませんでしたが、
露天風呂に若い女性の集団を発見。
早速突撃です。

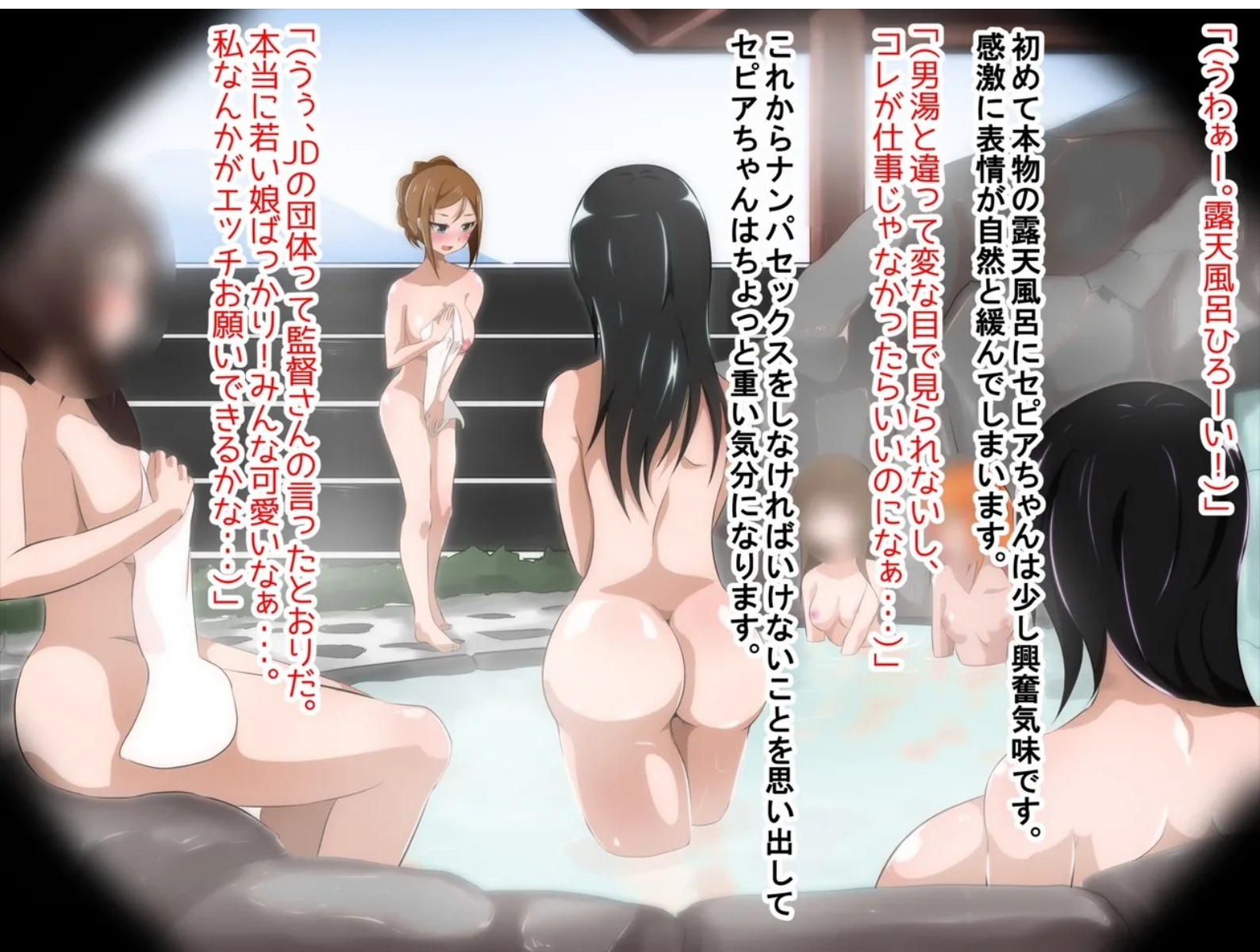
「うわあー。露天風呂ひろーいー」

初めて本物の露天風呂にセピアちゃんは少し興奮気味です。
感激に表情が自然と緩んでしまいます。

「(男湯と違って変な目で見られないし、
コレが仕事じゃなかったらいいのになあ……)」

これからナンパセックスをしなければいけないことを思い出して
セピアちゃんはちよつと重い気分になります。

「(うう、JDの団体って監督さんの言っただとおりだ。
本当に若い娘ばっかり！みんな可愛いなあ……。
私なんかエッチお願いできるかな……。)」



「すみません、一緒にでもいいですか？」
「どーぞ」

セピアちゃんは派手に髪を染めている二人組の娘達に話しかけました。
お話を聞くと、彼女達は大学のサークル旅行で来たと教えてくれました。

セピアちゃんは少し話し込んで彼女達と打ち解けることに成功しました。
しかし、赤髪の娘が何か気がついたようでセピアちゃんの体をチラチラと気にし始めます。



「あ、これ気づいちゃいました？」

「え!?」めんなさい」

ううん! いいんですよ。私、ふたなりっていつて
おちんちんが生えてるんです。
あ、ちゃんと女の子の子もありますよ」

「うそ!? ヤバ、ふたなりっていうの? 初めて見た!」

「そうなんですか? 良ければちよつと見てみます?」

「みたーい!」



彼女達は初めて見るふたなりに興味津々のようです。
セピアちゃんが彼女達の前に立って、股間を晒すと
彼女達はその大きさに驚いたように息を吞みます。

「デカッーヤバイ！」

「あはは…❤️まだ半勃ちですよ❤️」

「もっとデカくなるの!?!すーいーみせてみせてー!」

「ん❤️ちよつと、まってて❤️あんっ❤️」

セピアちゃんは皮被りのふたなりチンポを
シュコシュコと擦ります。

突然のオナニーショーに女の子達はびっくりしますが、
顔を赤らめながらも興味深げに見ています。



セピアちゃんが10回ほど扱くとあっという間に肉棒は倍くらいの大きさに勃起してしまいました。

「すっごい！えー!?まじで?やだ、めっちゃ太ーい」
「やばーい!元カレのチンポよりデカイ!」

女の子達はセピアちゃんの肉棒と自分の腕を比べてみたりしてきやあきやあと騒ぎます。

「ちよつと触ってもいい?」

「はい♥どうぞ♥」

赤髪の娘がそつとセピアちゃんの肉竿に手を添えます。

「あっあああん♥」
「きやあつ!」

触れた瞬間ビクンと肉棒が上向に跳ね上がり、セピアちゃんが嬌声をあげます。

「ごめんなさい♥気持ちよくって声でちゃった♥」

「ええー？触っただけだよー。」
「すっご、熱い。え、マジで本物だー！コレヤバイ！」

女の子達はセピアちゃんさんのペニスをペタペタ触りまくります。
「あれ？なんかヌルヌルしてきたー！」

「いい♡おちんちん気持ちよくなっちゃう♡んふうん♡」

「感じてるの？なんかえろーい」

「うん♡うん♡感じちゃう♡女の子におちんちん触られて
イッちゃいそうなの♡」

セピアちゃんも一緒になってペニスを扱っています。
我慢汁がトロトロ流れ出し、女の子達の手を汚します。
ヌルヌルになったペニスが
ドクドク脈打ち射精しようとしていました。



「ああっ♥もうイツちゃう♥♥」

セピアちゃんが体を強張らせると、ペニスがぶるんと震え
びゆるびゆると白濁液を迸らせました。

「わっ!」

「ヤバ、すっごい出てる! うわーめっちゃネバネバしてる!」

「はあはあ…♥ちよつとだけでちやった♥」

「コレちよつとじゃないでしょー!」
「うわ、まだ出るし」

女の子がペニスをぎゅうと絞ると、亀頭から「ぽりと
精液の塊が出てきます。

「ってゆーか、まだ超かたーい!」

「あはは、ごめんね♥まだちよつと出し足りないの…♥
お願いがあるんだけど…いい?」

「えー?なにー?」

「あのね…お口でして欲しいんだけど良いかな?」

「えー…どうするー?」

「うーん…アタシは良いよ♥っていうか

「こんな凄いチンポ初めてだし、ヤッてみたーい♥」

女の子達はセピアちゃんの前に跪いて直立する巨根に手を添えます。

「近くで見るとヤバイね……」

「ヤバイヤバイ！これ口に入らないって」

「舐めるだけで良いから♡ね？お願い♡」

セピアちゃんは女の子の頭を抱き寄せて亀頭に口づけさせます。
女の子はセピアちゃんの爆乳へ顔の半分を埋めてしまっています。

「ちゅ……れる……ん♡おつきすぎ！」

それに……ん♡すごいチンポの匂いするう♡

ヤバイってコレ！」



赤髪の娘は亀頭にめり込む程鼻を擦りつけて
スンスンと夢中で匂いを嗅いでいます。

大きく息を吐くとうっとりした表情を浮かべます。

「アタシ…この匂い好きかも♥」

「えーマジで？アタシも舐めたーい♥…ぺろ♥ちゅっ♥」

茶髪の娘も釣られて反対側からセピアちゃんの亀頭のエラを
かぷっと口に含みます。

「あっ…♥いい♥そこ舐めて…♥ああん♥」

敏感な箇所を両サイドから攻められて、セピアちゃんは
我慢汁をびゅっびゅと飛ばします。
下腹部にズシンと欲望が渦巻き、すぐに射精欲求が高まります。

「ちゅっ…♥ハアハア♥めっちゃビクビクしてる♥
また出るっばいっ」

「あ、あ、出そう♥思いつきり出ちやいそう♥
先っばお♥先っば吸って♥竿もシ「シ」して♥」



「あ、ああああン♥イツクううツ♥」

セピアちゃんはギュツと二人を抱きしめた瞬間、ペニスがびゅくんびゅくんとポンプのように蠕動し、大量のザーメンを射精しました。濃いジェル状の液体がポトポトと三人の体に降り注ぎます。

「んーっーうぐっ…んんん！」

「ふあっ、ちよっ…やあっ♥もおっ！きやああ♥」

女の子達はセピアちゃんの射精を間近で浴びて顔をべったり汚されてしまいました。

「うわあ…アタシ、飲んじやったよ…
ヤバ、なにこれ、出すぎなんですけどお♥」

「アタシも飲んじやった♥
ヤバイね男のチンポはこんなにでないよフツー。」



「っていうかまだチンポガチガチじゃん！」

セピアちゃんの肉棒はたっぷり射精したにも関わらず雄々しく反り返っていました

「ハアハア♥ごめんね…♥貴女達が可愛すぎるからおちんちん治まらなくなっちゃった♥」

「えー♥じゃーもっかいするー？」

「あ、あのね…セックスってできないかな？」

セピアちゃんのお願いに二人は固まってしまいます。

「ちょっと、コレは流石に入らないんじゃないかなー」
「うん…」

「だ、大丈夫だって！」

今までエッチした女の子はみんな挿入ったから」

「えー本当！？」

「（…一人しかやったこと無いんだけどね）」

「じゃ、ちょっとだけなら…」

「え!?マジでやんの!?!」

「だって、こんなすごいチンポ他にいないよ?どんな感じかやってみたいじゃん」

温泉の縁にタオルを敷き、同意してくれた茶髪の娘を寝かせるとセピアちゃんは彼女のおまんこを優しく撫でます。

「あ…アタシも!やっぱ、アタシもやりたい!」

友人の気持ちよさそうな様子を見て赤髪の娘も気が変わったみたいです。

茶髪の娘の上に跨って、セピアちゃんに向かってお尻を向けます。



「ありがとうー♡二人とも大好き♡」

「きやつ...♡」

「やァン♡チンポあつっうい♡」

セピアちゃんは抱き合う二人の間にふたなりチンポを擦り、素股をします。ぬるぬるの硬い肉棒を挟んで女の子達が艶めかしく肢体をくねらせます。

「ああ♡キレイなピンク♡もうぐちよぐちよ♡挿れるね♡」



セピアちゃんは茶髪の娘のおまんこにぐりぐりと亀頭を擦ります。
そして、その穴にゆっくりとふたなりチンポを沈めてゆきます。

「おっき…っ！…あああっ！…あああっ！
ヤバイヤバイヤバイッ！裂けちゃうう！」

「もうちよつと…♡ごめんね♡がんばって
もうちよつとだからあ♡」

セピアちゃんは尻を左右に振りながら
狭い膣穴にペニスをねじ込んで行きます。

その膣穴の強い抵抗にギチギチと締め付けられて
セピアちゃんはそれだけでイッてしまいそうでした。



「あ…は、はいつた♥分かる?はいつちやったよ♥」

「んんんん…!はあゝゝゝ…
ハアハア…♥ヤツ…バイ♥」

「す…、お腹、膨らんじゃって…!どんな感じなの?」

「わっかんない♥めっちゃいっぱいになってるう…!」

「あっ♥おまんこキツつ…い♥
ごめんね…♥すぐイクからっ♥い、イクっ」

「きやあああ♥」

セピアちゃんがブルブル腰を震わせ、
膣内で射精してしまいます。
じゅぽつと大きな水音と共に
ペニスが引き抜かれると

ザーメンが一気におまんこから溢れかえって
三人の股間をびしゃびしゃ濡らします。
ぽっかり開いた穴がヒクヒク痙攣しています。



「あは♡気持ちよかったあ♡次は…貴女の番ね♡」

「あ…♡」

べつとりザーメンで濡れたペニスを膣口に当てて再びゆっくりこじ開けます。

茶髪の娘よりもおまんこが柔らかく、少ない抵抗で亀頭が納まりました。

「ん♡はいつた♡ね？ちゃんと入るでしょ？うふふ♡膣内やわらかーい♡」

ズブッ♡

め♡

ん♡

ハァ♡ハァ♡

「いっついー！きつつー！まって、ちょっとタンマ！」

女の子は巨大な異物感に呼吸を荒げてしまいます。



セピアちゃんが少し待ってあげると、慣れてきたのか表情を和らげました。

「やっぱいい!こんなの初めて♥

膣内がチンポの形になっちゃってる♥
ごめん。アタシ動けないわ。動いて♥」

セピアちゃんは腰をゆっくりと前後させて、ペニスを段々と奥へ進めていきます。半分くらい挿入するとそこが限界のようでした。

「あふう♥半分はいつたよ♥」

「半分!?マジで!?もうあり得ないとこまでチンポきてるんですけどお!」

セピアちゃんのペニスは彼女の許容サイズを超えていて下腹をぼっこりと亀頭の形に内側から押して変形させていました。



セピアちゃんがパンパンと抽送を開始すると女の子は絶叫しました。

膣のヒダがペニスに絡みついてピストンする度にピンクの肉が捲れてしまっています。

「はん♡っん♡あんっ♡お腹の中全部出ちやいそう♡ヤバイ！
こんなのす♡いっ♡」

慣れてきて段々セピアちゃんの腰振りが早くなつていきます。女の子のお腹がペニスの形に隆起を繰り返しますが、最初と比べて女の子は突きこまれる度に感じているようです。

「すごいのお♥も、このチンポヤバイ♥超良い♥」

「あああ♥私も♥こんなにおちんちん入るなんて…!!
すごいよお♥気持ちいい…っ! ハアハア♥で、また出ちやいそう」

動きが小刻みになってきて
セピアちゃんは射精が迫っていることを伝えます。

「ん♥い、良い♥いいよ♥中でいいから♥いっぱいズコズコして♥」

「あ、あああ♥イクっ♥おまんこ中出ししちゃう♥」



セピアちゃんが女の子の腰を引き寄せ、奥へ深く突いた瞬間、
子宮めがけて再び射精をしました。

肉棒でぎゅっ詰まった膣の隙間から、
バケツをひっくり返したような勢いで精液が溢れました。

「はあはあ…♥いっぱいしちゃった♥」

「はひ…しゅごかった♥」

「アタシも♥ふたなりチンポマジヤバイ♥癖になりそう…♥」

二人の女の子にフェラチオと中出しセックスをしてもらえたセピアちゃん。

あと二人セックスできればミッションクリアです。

三人で仲良く体を洗っていると、様子を見ていた他の娘達が寄ってきました。

周りで見ていた娘は二人と同じサークルの友達だったようです。少しお話をすると、いわゆる「ヤリサー」のようでした。

セピアちゃんのこと

サークルのサプライズだと思っていたようです。

その場にいた女の子達ともすぐに仲良くなったセピアちゃん。みんなふたりチンポに興味津々のようです。

セピアちゃんはおみくちゃんにされてしまいました。

ひとしきり遊ばれた後、エッチの交渉をする。

一人セピアちゃんの相手をしてくれることになりました。

「こんなカワイイ娘とエッチできるなんて嬉しいー♥」

「あははW男の人みたいなこと言うんですねー」

「だって本当なんだもん♥それにこんなにおっぱいすごい娘
だったからテンション上がったちゃう♥」

「きゃっ♥」

セピアちゃんは女の子のおっぱいをお湯の中で揉みます。
その乳はセピアちゃんの爆乳よりもさらに二回りは大きいです。
130cmもある超乳は
大きすぎてブラを着けるのは諦めたらしいです。
ブドウの粒のように大きな乳首を摘むと可愛らしく喘ぎます。

「もうっ♥わたしだって…!」

「あ、ダメっ♥乳首…♥」

女の子が仕返しにはセピアちゃんの乳首をくりくり弄ります。

「ん♥♥また勃起しちゃっ♥」

「わあっ♥さっきも沢山射精してたのに
もう勃っちゃったんですか？」

お湯の中からセピアちゃんの勃起したペニスの亀頭部分が
顔を覗かせます。

「すごい力チカチ♥」

ドキン
にゅ
くちゅ

女の子はセピアちゃんと向き合って肉棒を両手で握ります。
そのまま感触を確かめるようにシコシコと扱きます。

「はああ♥いい♥上手♥」

「ふふ♥おつきくでも感じる場所は男の人と同じなんです♥」

「ううん♥やつん♥気持ちいい♥すごいね♥
サークルでいつもヤッてるから上手なの？」

「わかりません♥でも気持ちいいって言われると嬉しいです♥」



女の子の手コキでセピアちゃんのチンポ汁が搾り取られ、
とろとろと超乳の谷間に流れ落ちてゆきます。

「おっぱいヌルヌルになっちゃいます♥」

「本当♥ねえ、せつかくだしヌルヌルのおっぱいにおちんちん挟まれたいなあ♥」

「ふふ♥本当に男の人みたい♥男の人みんな私のおっぱいで
したいって言うんですよ」

「だってそんなおっぱいしてたら
誰だっておちんちん挟みたくなっちゃうよ♥」



女の子はセピアちゃんの我慢汁を谷間に
たっぷりローションのように揉み伸ばします。
そして、むにゅんとその乳肉で剛直を包み込みました。

両手で乳を押さえつけ揉みしだくと、勃起した乳首が擦れて
女の子も気持ちよさそうに声を漏らします。

「やわらかあい♡むちむちしてる♡」

「ふう♡すごい♡おっぱいから飛び出ちゃってる♡」

「こんなにおっきいの初めて♡硬いのが乳首に当たるう♡」

「おちんちんすっぽり包まれるの気持ちいいよ♡
腰動いちゃう♡」

セピアちゃんはズリズリとペニスをおっぱいに擦り付けます
亀頭のエラが女の子の乳首に引っかかって
お互いに感じてしまっています。

「ああ…デカパイすごい♡パイズり最高♡」



「すごい♥おちんちんのドキドキが伝わってくる♥
あっ♥あっ♥気持ちいい?気持ちいいの?」

「射精したいっ♥おっぱいに私の♥いっぱい♥」

セピアちゃんは腰を突き上げ抽送の速度をあげます。
ペニスから精液が混じった粘度の高い我慢汁が込み上げ、
ぐちゅぐちゅと泡立って超乳をべっとり汚してしまいます。
女の子も乳を力二杯寄せてバシヤバシヤと上下させています。

「射精して♥ふたなりおちんちんの射精見せて♥」



「んあぁっ♡射精るぅぅっ♡」

ザーメンが噴水のように噴き出し、女の子の顔にびしゃびしゃ掛かります。

「んっ♡ぷあっ♡ちよっ…♡やん♡まって…出過ぎ♡」

数秒にわたる射精に女の子はびっくりしますが、恍惚とした表情でセピアちゃんの熱い射精を浴びます。精液が女の子の超乳にぼたぼたと落ちて、白くコーティングされてしまいます。

「ああ♡べとべとお♡こんなに出るなんて♡」



女の子は顔に掛かった精液を拭ってしげしげと観察します。
しばらく指で掬って眺めるとぺろっと口に入れました。

「濃い♡ん…ちゅ♡うふふ♡えっちな味♡男の人の味だぁ♡」

「ああ♡たまんない♡もっと舐めて♡」

セピアちゃんは女の子の口に直接亀頭を押し付けて
精液をキレイに舐めさせました。

女の子は蕩けた表情で精液をぐくんと呑み込みます。



「ハアハア♥私、舐めてたらエッチしなくなっちゃいましたあ♥」
女の子はセピアちゃんにもたれかかります。

「じゃあ挿れちゃおう♥」

「ちゃんと挿れられるかなあ♥」

「大丈夫♥ほら、ごこでしょ♥」

セピアちゃんは女の子を立ち上がらせ、
対面座位をするように促します。
女の子はセピアちゃんの肉棒を掴むと片足を上げて
挿入の位置を手探りで調整します。

先端にグニグニと女の子の柔らかい恥丘を感じて
セピアちゃんはうっとりとし息をつきます。

「いいよ♥そのまま腰を落として…♥あつ…はいって…」

「あああああつ♥♥お、つきいらい♥」



ぴったりと穴の位置に合ったペニスに向かって女の子は
ゆっくり腰を降ろしてゆきます。

ずぶずぶと先端が埋まり、
3分の1程度で許容量を超えてしまいます。

女の子はぶるぶると体を震わせてセピアちゃんのおっぱいに
しがみついています。



「ハアハア♥はははは♥あははは♥すごい♥
おなかがポコってなっちゃってる♥」

「ああ♥♥♥子宮当たってるよ♥♥♥私のおちんちん♥」
「ひいん♥ふ、深い♥♥♥こんなにいっぱいになるの初めてえ♥」
「いっぱい濡れてきたね♥じゃ、そろそろ動くね♥」

セピアちゃんは腰を浮かせて上下に揺らします。
ペニスがずるずると女の子の膣を出入りします。

二人の分泌液が混じって結合部から垂れて
女の子のお尻を濡らします。

巨大な乳房がお互いにモチモチとぶつかって
厭らしく歪んで揺れます。

ぐ
る
ん

す
ば
す
ば

「きやあつあ♥あん♥あん♥」

「あつあつ♥おっぱいも♥気持ちいい♥もっと強くして
ほら、おちんちんいっぱいあげるから♥」



「らめ…♡おまんこ♡壊れちゃう♡いつっ♡いつっ♡イッちゃう♡
変になるう♡」

「ああ♡いいよ♡もっ♡とぎゅっ♡てして♡き、気持ちいい♡」

ずちゅずちゅと激しい水音を鳴らして激しく責め立てます。
奥のポルチオ性感帯を突かれて女の子はイキッぱなしです。

「あ、あ♡私も♡もう♡おちんちんイキそ
イクっ♡♡イッくうう♡」

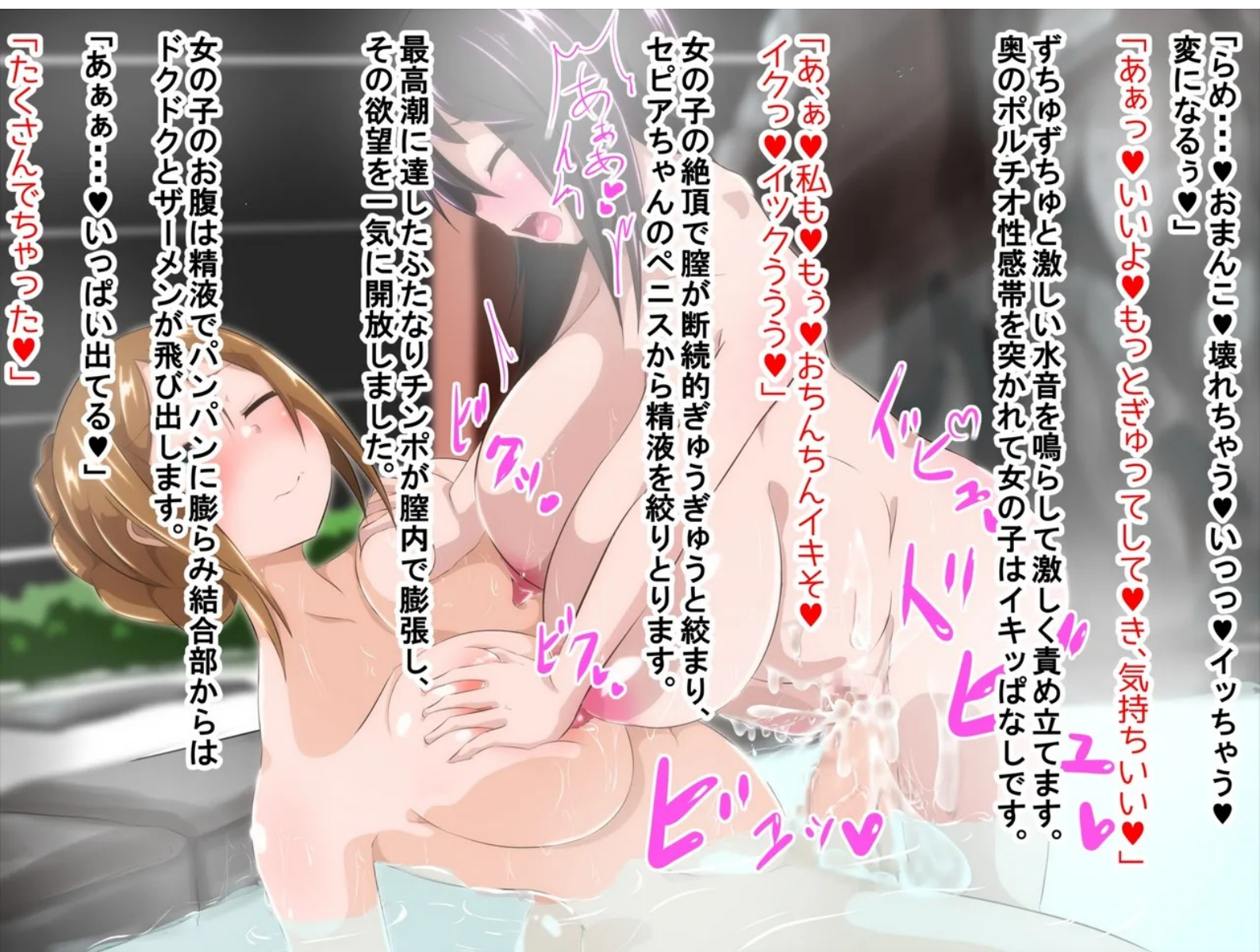
女の子の絶頂で膣が断続的ぎゅうぎゅうと絞まり、
セピアちゃんのペニスから精液を絞りとりまます。

最高潮に達したふたなりチンポが膣内で膨張し、
その欲望を二気に開放しました。

女の子のお腹は精液でパンパンに膨らみ結合部からは
ドクドクとザーメンが飛び出します。

「ああ…♡♡いつぱい出てる♡」

「たくさんでちゃった♡」



「お疲れ様でした」

「お疲れ様です」

「ミッションばっちりだったね！」

「えっ、見てたんですか」

「そりゃあ撮影だからね。モニターしてました」

「うー。ま、まあいいですけどお」

「すごいねー。いきなり3pしちゃってー。」

「私もびっくりしました。できるもんなんですねえ」

「セピアちゃんすごいナンパ上手なんだねえ。
次は素人ナンパモノやっちゃおうか」

「ええっ!?やーめーてー」

「あはははは。それじゃあ最後に視聴者さんに一言」

「えっえっ?はいっ!私でいっぱい気持ちよくなって下さい!」

「ありがとうございました。」

















































































